

松浦博厚さんを偲ぶ

40年以上前から付き合いのあった松浦博厚さんが今月11日に死去された。死因は肝細胞がんだったと聞く。松浦さんは私よりも年下で70歳だった。よく言われることだが、年下の人に先立たれるのはショックなことだ。私よりも年上の方が松浦さんの訃報を聞いて、年下の人に先立たれると自分がせきたてられているような気がするというメールを送ってこられたが、これはある程度以上の歳の人にはわかる気持だろう。

長い付き合いがあったのだから、本来は告別式に参列するべきなのだが、お葬式は広島市の松浦さんの自宅の近くで行われたため、私は参加せず、弔電を打つだけにした。その弔電に対して、一昨日松浦夫人のトヨさんから受取りの葉書をいただいた。トヨさんには、1970年代の中ごろ、一度会ったことがあったかもしれないが、私にははっきりとした記憶はない。

歳を取ると、義理を欠いてもよいのだということを私に教えてくれたのは宮澤辰雄先生である。宮澤先生は、松浦さんにとっては大阪大学大学院での指導教授で、私にとっては東大生物化学科での上司だった（宮澤教授、田隅助教授でひとつの研究室を構成していた）。宮澤先生がどういうときにそう言われたかは憶えていないが、この言葉は妙に私の脳裏に焼きついた。教えてくれた宮澤先生は、まだ65歳で現役の蛋白工学研究所長のときに、特発性間質性肺炎という今でも治療方法がないらしい難しい病気に取りつかれて急逝された。健康に

人一倍気を使っておられた宮澤先生より、私は既に8年以上長生きしている。人の生死というものはわからないものだ。

私が松浦さんに最初に会ったのは何時だったかははっきりしない。1960年代であることは間違いないが、1965年8月から2年間私は海外に出ていたもので、その前だったのか、後だったのかがはっきりしない。私がぼんやりと憶えていることは、私が大阪大学蛋白質研究所の宮澤研究室に行ったとき（阪大蛋白研が吹田キャンパスに移転する前で、まだ大阪市内の中之島にあった時期だったと思う）、研究室内で静かに何かしている人が居たことで、それが松浦さんだったのではないかということだ。

松浦さんは若いときから口数の少ない人で、用がない限り、自分から話しかけてくるようなことはなかった。これは生来の性格で、多分最後まで彼はそうだっただろう。しかし、松浦さんが付き合いにくい人だったかという点、そうではなく、実は彼ほど親切でよく気の付く人はいなかったと思う。また、彼は一旦引き受けたことは完全に責任をもって実行してくれたが、自分がしたくないことは初めからきちんと断ってきた。そういう意味で、松浦さんは100%信頼できる人だった。そういう松浦さんだからこそ、広島大学で理学研究科長に選出されたのだろう。

私は松浦さんと共著の総説を1983年に出版したことがある。それは、H. Matsuura

and M. Tasumi, "Force Fields for Large Molecules," *Vibrational Spectra and Structure*, Vol. 12, J. R. Durig, editor, Elsevier, Chapter 2, pp. 69-143 だ。これは、編者の Durig 氏（当時サウス・カロライナ大学教授）から私に話があって、書くことになったのだが、私は、これを松浦さんとの共同で書くことにしたいと思い、彼を説得した。当時松浦さんは広島大学理学部助教授だった。引き受けてくれた松浦さんはどんどん原稿を書いてくれた。できあがったものを見て、私は驚いた。何からなにまで完璧といってよいもので、私が手を入れたり、追加するべきことはほとんどなかった。それを共著にするのは大いに気が引けたのだが、元々そうすることで始めてしまったことなので、共著にしてもらったが、後あとまで私には気になった。

英語に *meticulous* という言葉がある。辞書には、細かいことにこだわる、凝り性の、注意深い、綿密な、などの訳がある。私は、松浦さんは *meticulous* な人だったと思う。必ずしも良い意味だけに使われる言葉ではないかもしれないが、松浦さんの性格を表現するのにはぴったりの言葉だ。私自身も細かいことが気になる方だが、松浦さんは私以上だった。

私は、上記の共著の総説を出版するよりも少し前の 1980 年 7 月に松浦さんと一緒にアメリカとカナダを旅行したことがある。初めに、サンフランシスコに行き、バークレーのカリフォルニア大学を訪問してから、Ann Arbor のミシガン大学に行き、その後、オタワで開催された第 7 回国際ラマン分光学会議に出席した。

この旅行では忘れられないことがあった。サンフランシスコからデトロイト (Ann Arbor に近い) に飛ぶ直行便に適当なものがなく、セントルイスで乗り換えることになっていた。セントルイスまでは予定どおり行けたのだが、乗り換えた飛行機内の席に付いてから、機体に問題があることがわかって、その便はキャンセルされてしまっ

たのだ。こうなると大変だ。アメリカ人は日本人以上に興奮して、我勝ちに代替の便を予約しようと航空会社係員に詰め寄るのだ。係員も興奮して早口でまくしたてるのだが、残念ながらこちらには何を言っているのか十分にはわからない。私は、悪くすると、今日はセントルイスで泊まることになるかと覚悟した。しかし、できるだけ頑張ろうと松浦さんと励ましあった。連れがあるということは、こういうときには心強いものだ。私が聴き取れなかったことを松浦さんが聴きとってくれたこともあった。

結局、アメリカ人たちよりも遅れたが、インディアナポリスでもう一度乗り換えてデトロイトに行く便の予約をすることができた。それらの便は予定どおりだったのだが、デトロイトに着いたのは午後 11 時ごろで、その夜は空港内のホテルに泊まった。不思議だったのは、デトロイト空港に着いたとき、私たちのバゲージは先に着いており、ベルトコンベヤーから下ろされて横に置いてあったことだ。多分、別の便で運ばれて来たのだろう。ともかく、私たちはこの点では運が良かった。

私が松浦さんと最後にメールの交換をしたのは、今年の 2 月 2 日だった。私は、旧島内研究室関係者の集まりのことを彼に知らせたのだが（松浦さんは 1970 年代の半ばに 2 年間ほど島内研の助手だった）、彼からの返事は、出席したいが、このところ体調が悪く病院通いをしているので欠席するというものであった。私は、早い健康回復を祈るというメールを送ったが、どれぐらい体調が悪いのか問い合わせることはしなかった。会えば気軽に尋ねることもできただろうが、わざわざメールで尋ねることは控えた。

それから 10 箇月。松浦さんは不帰の客となられた。まことに残念の極みである。松浦さんのご冥福を祈るのみ。（おわり）